

栗棟美里 – アーティスト・ステートメント

栗棟美里は、写真を起点としながら、私たちが「見ている」と信じている像や現実が、どのような条件のもとで成立し、また揺らいでいくのかを探る現代美術家である。デジタル技術や情報環境の変化によって、イメージが現実を説明するものから、現実そのものを規定する存在へと変化する現在、栗棟は〈見ること〉そのものを問い直す実践を続けている。

近年の制作では、写真をレンチキュラー印刷へと変換する手法を主軸としている。レンチキュラーは、鑑賞者の立ち位置や身体の動きによって像が変化する特殊な印刷技法であり、一つの固定された像を提示することができない。栗棟はこの特性を用いることで、視覚を受動的なものではなく、時間や身体と結びついた不安定なプロセスとして提示する。作品は「何が写っているか」ではなく、「どのように見えているか」を問題化する装置として機能する。

こうした制作の背景には、現実とは外部に固定されたものとして存在するのではなく、認識の積み重ねによって立ち現れるという考え方がある。栗棟は東洋思想の一つである唯識思想を、宗教的・教義的なものとしてではなく、現代の視覚環境を読み解くための思考の枠組みとして参照している。デジタルイメージが直接的な経験に取って代わり、記憶や信念までもが画像を通して形成される現代において、「現実はどのように信じられているのか」という問いは、視覚表現の問題として切実なものとなっている。

栗棟の作品において、イメージは証拠や記録としての役割を失い、常に不完全で仮設的な存在として提示される。像は完全に定着することなく、鑑賞者の動きとともに揺れ動き、複数の状態のあいだを行き来する。その不安定さは、スクリーンやアルゴリズムを介して流通する現代のイメージの振る舞いと重なり合う。

レンチキュラーという物理的な装置を通して、栗棟はイメージの非物質化が進む現代に、あえて身体性と物質性を引き戻す。作品は視覚的な即時性を拒み、時間をかけて見ること、位置を変えて見することを鑑賞者に要求する。そこでは意味は一瞬で理解されるものではなく、見る行為の反復の中で徐々に立ち上がっていく。栗棟の実践は、視覚の不確かさや認識の脆さを露呈させると同時に、現代美術が「見ること」を再び思考の対象として引き受けるための場を提示している。